

真珠菴ヲ本山とセしが、今ハ城州綴喜郡薪村酬恩菴ヲ本山とすると也、猶亦、自然位牌の裏杯ニ御名前どもハ無之哉、其外訳書などハ無之哉、過去帳等ニも記し有之哉と尋遣セし処、表ニ法名相記し裏ニ年月日記し有之のミにて、外ニ俗名等記無之、寮舎過去帳にも年月日記有之、外に訳書ハ無之旨宸首坐ヲ申越、右牌名ハ真珠菴内滴凍軒と云祠堂ニ記有之、本坊ニ位牌有之、滴凍軒ハ則宗富か居住セし所にて、本坊真珠菴ハ古昔ハ通仙院・東雲院・滴凍軒・梅屋軒の四軒より輪番ニ致居、四ヶ寺ハ真珠庵境内ニ有之、往古ハ真珠菴・薪酬恩庵・住吉床薬菴・江州少林寺、右四ヶ寺互ニ輪番ニ護寺いたし候事の由也

(表紙題箋)

森家先代実録 五



森家先代実録卷第五

目録

一 忠政君慶長十九年迄之御事実

森家先代実録卷第五

忠政君 始 長重 又 一重 忠重

御幼名 千丸 御官名 右近大夫 美作守

一元亀元庚午年於金山生レ給ふ

一天正十午年御歳十三春、初て信長公へ御奉公に出給ひ、或

時御次の間に詰給ふ、梁田弟河内守前廉より御児小性にて相詰しが、千丸君の初心の御姿ヲ事おかしくや思ひけん、ざれかより御顔ヲ撫なから信長公の御前へ出しラ、千丸君其儘追詰、彼人の頭ヲ扇子ヲ以て二ツ打給ふ、信長公上覧有て、千めハ中々側廻リニ仕るゝ奴にてなし、母か方へ戻セとの上意にて本能寺の御供ニはづれ、不慮に御命遁させ給ふ

一 同年六月二日、於京都、信長公御父子并蘭丸君・坊丸君・力丸君・伴正林・伴太郎左衛門等討死のよし、同三日辰刻伴氏か家来共江州甲賀へ罷歸斯と告る、其節、長可君ハ川中島ニ御在城、其比御母公妙向様と千丸君ハ、為人質安土に被成御座しか、伴右衛門尉後改惟安ハ、前かた可成君・長可君分けて御目ヲ掛られ候故、此節御兩人ハ嘸十方にくれ給へんとて、甲賀の一族ヲ語らひ、同四日、日野越の間道ヲ越下山村より安土へ出るハ、畑村より長谷越本道五里半の所ハ、此節なれハ道程如何と氣遣して、八田安土へ行、妙向様・千丸君ヲ越より岡屋村へ出安土へ行、安土へ行、妙向様・千丸君ヲ守リ奉り、同五日甲賀へ帰り、則右衛門尉か宅へ移し奉

右近ニ今度川中島被遣候事、家康公御差図にて一段御心意、御普代同前ニ被思召候条罷帰申聞セよと、御直の上意にて御腰物拝領す、其節林長兵衛より外ニ誰も御前江被召出、御直之上意并御道具拝領之もの者人も無之とかや

一同年三月^{上旬}、海津城引渡有て御入城の節、井戸宇右衛門、各務兵庫ニ向て云けるハ、天晴此城ニ籠らハ、凡五ヶ国拾ヶ国寄来る共落城すへきニ非スと云、各務か云、中々悪キ挨拶也、恐らく此馬出より^{松代城ニ馬出ナ}、不審と云、数万騎ヲ操出し、近国・他国切随へ幕下ニセンと申されかしと有けれハ、流石の井戸も閉口す、抑此城ハ、武田の家臣小幡山城守繩張にて^{甲州武田家の節ハ、高坂彈正昌信居城也山本勘助の差図にて小幡山城繩張なり}、角辻丸馬出井虎口・立虎口三軒之垣^(朱書)ニ策ヲ付、大曲輪内外斜之升形・袖之升形・坪升形・隱曲輪・横曲輪・武者溜・着到櫓・見切櫓・打弘引橋・踊橋・廊下橋・折壁・矢狭間・葬落・重坂・相坂・三段雁木・武者走・犬走・水の手等迄、秘術ヲ尽たる城取也、扱此節、春日周防も

致病死候故、其親類一在所ヲ礫ニ被成御懸候、其節信州ハ無人の国なれハ、徒党のもの不殘御成敗にてハ亡所致へしとの風聞故、忠政君御郡廻被成候前ニ礫ニ懸ケ入御覽、御成敗被成候分にて、御通の跡にて悉命御助ケ可被成と下劣のもの申なす、左候へハ一日礫に懸りても如何とて、日雇ヲ雇ひ礫の名代ニ懸りけるか、米壹石の日用にて懸る者もアリ、又ハ七・八斗にて懸る者も有之、壹石出さんより自身ニ懸覽トテ、身ヲ持たる者の内ニも自身ニ懸るも有之由、海津の乾の方ニ当り、鳥井坂よりなしか池の左、水の岨迄式拾丁余リニ礫ヲ懸並へて置たり、然る所へ忠政君追付御通、と前走りの者参るといなや、大身の鎧ヲ以片端より突て通る、其時礫木の上より、日用也と口々ニ断申たると也、百々瀬加兵衛・三溝三右衛門兩人共ニ信州彼辺の地侍なりしか、当家へ召出され右の咄度々云たる由也

其比男子六歳ニなるヲ耆人、御竹様養ひ給ふて其名ヲ又左衛門と云、大膳亮重政君御草履取ニ遣れしに、

重政君元和四戊午年六月五日、御歳廿六にて御遠行

瑞応院殿、御葬地ハ吉南郡香々美真経村原谷口櫓尾畝ニ御墓印ニ移植て有之久米南郡中島村江引籠百姓して居たりしか、同郡北村の平井と公事ヲ取結び、寛永十六己卯六月三日ニ、長法寺河原にて一家不殘断罪、誠奇妙成る事云云

一忠政君川中島へ御移の節、秀忠公の御書

去ル廿五日其許御移之由珍重存候、万事可為御取紛候所、早速御飛脚祝着不斜候、先書如申候程近候間可申承与存、本望之至候、猶期後音之時候条令省略候、恐々謹言

四月二日

江戸中納言

秀忠 御判

羽柴右近大夫殿

御返報

其元御^{尚々其元御有付候哉承度存候、誠久敷不懸}移ニ付而、以使者申入候、仍為御祝儀太刀一

御目、御床敷存候、万事期後音時候腰・金子百枚并鉄砲百丁令進入候、先書如申入候程近御さ候間、切々可申談与存満足不過之候、猶口上申含候間令省略候、恐々謹言

四月六日 秀忠 御判

御折帋御書ニ切封御上書ニ

表 羽右近様 人々御中

裏 江戸中納言 秀忠

一慶長五庚子年八月中旬、家康公上杉景勝為御退治御進発之節、右近大夫君御供被成候

聞伝記云、慶長五庚子年七月十九日、会津景勝依逆心、為御退治家康公御進発、御先陣江戸中納言秀忠公、相随ふ人々ニハ

結城宰相秀康公	御 舍 弟	松平下野守
羽柴藤三郎	皆川山城守	成田右衛門尉
真田伊豆守	松平飛騨守	松平下総守
榊原式部太輔	井伊兵部少輔	本多中務太輔
日根野徳太郎	石川玄蕃頭	森 右近大夫

仙石越前守 多賀谷左近 水谷右京大夫
山川式部太輔
都合六万九千三百六拾騎

先手ハ佐久山太田原ニ陣ヲ取ヘ、後陣の勢ハ古河栗
橋ニさしつかへて有之、七月廿一日、内府公御馬を
被出、四日路先手小山ニ至而御參陣、然る所ニ天下
徒党一統ニ与テ、秀頼公之被補御敵之由如挽櫛齒注
進有之、於其儀ハ、会津ヘハ結城宰相秀康公為大將
数万騎ヲ率し被指向、所々仕置等被仰付、内府公ハ
御上洛有テ、逆徒等悉御退治可有旨被仰含、山城宮
内少輔被差上、江戸ニ至て被納御馬、秀忠公宇都宮
迄御進発之所、会津表不余猛郡ヘそ同陣与被仰出、
御上洛と夜ヲ日に繼て急セられ候也、然而真田安房
守插逆心、從上州犬伏之町引返シ、信濃国小鼻郡伊
勢崎之城ニ楯籠之由、達上聞之条火急ニ可討果旨被
立檢使、是則不捨兩葉用斧柯謂歟、御供衆

森 右近大夫 真田伊豆守 仙石越前守
榊原式部大夫 大久保相模守 酒井右兵衛大夫
日根野築後守 石川玄蕃頭 本多佐渡守
都合三万八千七拾騎

其節上方ニ而ハ石田治部少輔三成企謀叛、秀頼公の
仰とて色々忠政君ヲ招けれ共、曾て無御承引、御返
事ニハ当初三左衛門可成鋒先の武功ヲ以、信長公よ
り於濃州金山七万石ヲ賜り、其後武藏守長可忠功ヲ
以、信州川中島四郡加増之所、武藏守於長久手秀吉
公の為に雖遂忠死、其節某幼少たるに依て本知金山
ヲ賜ひ、信州四郡ハ被召上、其恨幾クそや、然とも
世に随ひ徒に年月ヲ送し所に、去二月信州海津城ヲ
家康公より被下候事 秀忠公より 莫大の御厚恩なり、
何ぞ此恩ヲ忘却して秀頼卿ニ属せん事其謂なし、所
詮羽柴ヲ返して森氏ニかへるへしとて、此節源姓森
氏ニ復セらる、此砌、家康公より御持筒銀飾の御鉄
砲二丁御拝領被成候也

慶長五庚子年八月六日、石田三成より真田安房守ヘ遣候
書簡之内ニ云

先書ニ度々申入候、參着如何、其国一ヶ国の仕置貴
殿江被仰付旨、輝元・秀秋・増右・長大・徳善、從
拙者可申達旨被申候間、其心得ニ而深志・川中島・
諏訪・小室・甲州迄之儀者、成程弓矢ニ而も御才覚
ニ而も可被仰付候、何も上方ニ妻子有之衆ニ而候間、
不可及異儀候、若惡意之方ハ押而成敗可有之候、此
等之趣各相談之上被申定候間、其旨可被申付候、被
移時日候而者其詮有間敷候、但、御手ニ余り候衆ハ
此方江可承候、美濃衆可被差向旨議定候、羽柴右近
儀者各別而遣恨、其故ハ御若年之秀頼様ニ申掠新知
拝領曲事との被仰事ニ候 下略

一同年上杉景勝征伐之節、忠政君供奉関東ニ趣セられ、此
節の御書

為御見廻被差越林長兵衛、殊、太刀一腰・馬代銀貳
拾枚・鶴二并端午之帷子五生絹・越布百端・蠟燭五

百挺遣被下候、濟々被入御念段欣悦之至、書中難申
尽存候、然者其元御仕置等被仰付、弥御在付之由尤
ニ存候、將又其以来久敷不能面上、不断御床敷存計
候、猶期後音候、恐々謹言

五月九日 江戸中納言 秀忠 御判

羽柴右近殿

御報

遠路被入御念、御懇書本望存知候、如仰今度為御見
廻被差越林長兵衛、祝着之至候、將又会津之事先書
ニも如申入候、伊奈図書頭被差遣候所、景勝上洛ニ
被相定候由候間、右之使者罷上候、乍去京都之様子
いまた不相聞候付、不能細筆候、替儀候ハ、從是可
申述候、恐々謹言

五月十八日 江戸中納言 秀忠 御判

羽柴右近殿

御報

(44)
雖無差儀候、一書令啓達候、仍今月上旬内府可為下
国旨申来候、為御心得如此候、替儀も候者重而可申
入候、恐々謹言

六月朔日

江戸中納言

秀忠 御判

羽柴右近殿

御宿所

御懇札本望之至候、仍而今度会津表へ出陣ニ付而、
委細承仰之通令其意候、内府近日下国之由候条、御
内意之通可為申聞候、先書ニハ六月上旬与申入候キ、
重而申来分ハ中旬之由ニ候、猶替儀候ハ、從是可申
伸候、恐々謹言

六月六日

江戸中納言

秀忠 御判

羽柴右近殿

御返報

態以飛脚申入候、仍内府今月十六日ニ大坂江被罷出
候由申来候、近々可為下着候、猶其節可申伸候間、
令省略候、恐々謹言

六月廿八日

江戸中納言

秀忠 御判

羽柴右近殿

御宿所

御折帛令披見候、仍昨廿一日至宇津宮着陣之由御太
儀共ニ候、頓而其元江参以面可申候条、令省略候、
恐々謹言

七月廿二日

家康 御判

川中島侍從殿

(45)
其元*御着陣付而、早々御懇札本望之至候、我等事

昨日到古河令着陣、内府も江戸を廿一日被致出馬候
間、頓而到其地可為着陣候、何事も面上可申伸候、
恐々謹言

江戸中納言

七月廿二日

秀忠 御判

羽柴右近殿

御報

尚々今度ハ早々ニ而、御残多次第に候
今度ハ御越之処、早々御帰残念次第候、然者眼病い
かゝ候哉、無心元候、不及申候得共、無油断御養生
專一候、猶重而可申入候

七月廿五日

秀忠 御判

羽右近殿

一同年八月十九日、信州上田鞠子城ニ真田安房守昌幸・息
左衛門佐昌尚、石田三成ニ組し天下ニ対し野心ヲ插ミ楯

籠るの由上聞ニ達し、新將軍黃門源秀忠公信州表へ御進
発、御供衆中ニハ

森忠政 信州川中島城主

石川玄蕃頭三長 同国松本城主

仙石越前守秀久 同国古諸城主

日根野織部正高吉 同国諏訪城主

榊原式部太輔康政 上野館林城主

大久保相模守忠隣 相州小田原城主

本多佐渡守正信

真田伊豆守信之

酒井兵衛大夫等

都合三万八千七拾騎也

御旗本前後左右段々の御備也、然るに東国御先衆甲り雄
の若武者共真田か館へ取詰押困ム、忠政君御進発之刻、
各務古兵庫元正ハ老衰して大病故、息兄四郎兵衛ニ久之
丞ヲ添、弟藤兵衛に吉左衛門ヲ添教訓して曰、真田か城
上田へ押寄るにおゐてハ、安房*ハ聞ゆる武將也、獵師
鉄砲馬足輕と云事有り、深ク働事ヲ慎へし、敵必大物見
の如ク騎馬三十騎程足輕ヲ引連レ、味方の備の横へ廻り
て小セリ合ヲ初ムへし、敵彼術有ならハ、兼て旗本ニ騎